講演 (2)　現代社会と宗教

タルコット・パーソンズ

司会　新しい朝を迎えまして，パーソンズ先生の第2日目のご講演を拝聴いたしましょう。

私は，経済学部に所属しております北村でございますが，本日の司会役を仰せ付かっております。

経済史を専門にしておりますが，昨日の先生のご講義と，それに伴うディスカッションを拝聴いたしまして，非常に感銘をうけました。私どもでは，たとえば「市民革命」と「産業革命」については，十分その射程の中に入れておりますけれども，「教育革命」と申しますのは，これは新しいイマジネーションを与えていただきました課題です。私は，また，この日の先生のご講義を通しまして，さらに関西学院大学における経済史研究に，大きなあゆみを踏ませていただきたいと思います。

さて，本日の先生のご講義は，もうすでにその頭が，昨日らい見えております「宗教」の問題であります。つまりパーソンズ理論のビリーフ・システムであります。先生のこの「宗教」と「近代社会」との関係につきましてお話をしていただけることは，たいへん光栄であります。どうぞみなさんがたのご静聴をお願いしたいと思います。

90分時間がございますので，40分間，先生にご講演をうけたまわり，10分間休憩させていただき，あと40分間後半に移らせていただきたいと思いますので，よろしくご協力のほどをお願い申し上げます。また昨日らい質問用紙をおわたししております。これは本日の，質疑応答の時間のためでございますので，どうぞこの質問を，日本語で書いてお入れ下さい。質疑応答の司会は佐藤教授がいたしまして，みなさんがたのご要望に応えようとしております。

さあ，それでは，新しく先生のご講義を，拍手をもってお迎えして，お伺いいたしましょう。ありがとうございます。

司会およびみなさん，ありがとうございました。昨日話しましたトピックの産業革命，それに教育革命は，今日お話しますことのあとにおこった，つまり今日のトピックが昨日のトピックの産業革命，教育革命に先行したということができると思います。そしてそれはまた，教育革命，産業革命のための必要な条件を設立したと言えると思います。私の今日の話は西洋におけるこの問題について集中したいと思います。もし時間がありましたら、第2部におきまして日本における類似点について，少々示唆したいと思いますが，この分野においては，私はあまり知識はございません。

I

今日のトピックを始めますにあたって，その出発点として一番いいと思いますのは，昨日，武藤先生がおっしゃいました，セキュラリゼーション(世俗化)だと思います。この用語は西欧の学術雑誌の中でいろいろ議論をされ，また両義的なところがあります。

私はこの用語には二つの基本的な意味があると思います。その一つは，宗教の崩壊というふうに，あるいは衰微というふうに翻訳されてもいいかと思います。この見地は，最近お亡くなりになりました，ソローキン教授によって述べられたものでもあります。私はソローキン教授と同じ学科におりました関係上，彼とよく論議をすることがありましたが，私は彼の立場とは全く意見を異にいたしております。彼は今申しましたように，宗教は衰微してきているというふうな意見であります。

これに反して，もう一つの立場は，マックス・ウェーバーによって代表され，宗教革命と禁欲主義のプロテスタンティズムによって代表されているものであると思います。この意味におきましては，宗教は衰微しているのではなくて，その反対に発展してきているという見方がとられます。

宗教革命はヨーロッパ全体において，たいへん重要な転換期でありました。これは昨日申し上げました二つの意味における革命であったということが言えると思います。宗教革命によってヨーロッパ全体は，動乱の中に巻き込まれました。宗教戦争は100年も続きましたが，17世紀に入りまして，やっとそれはおさまるようになりました。プロテスタンティズムのいろいろな勢力範囲（ドメイン）も，その頃に各地でおちつくようになりました。カルビニズムは，オランダ，イングランドにおちつくようになりまして，フランスでもそうであります。ジョン・カルバンはもともとフランス人でありました。彼はスイス系フランス人ではなく，本当のフランス人でありましたが，のちにスイスに行ったのであります。ルーテル派は中央ドイツおよびスカンジナビアの方におちつくようになりました。

英国でもこの問題は，だいたいこの頃に決着がつくようになりました。これは1688年のグローリアス・オブ・レボリューションという俗名によって知られております。問題はプロテスタントが王の席につくようになったということであります。ジェームス2世はこのために，国から追われることになったわけでありまして，それで英国市民の次の女王はオランダから来たのでありますが，このためにジェームス2世は英国の市民の中でただひとり，市民権を奪われたものだと言うことができます。ですから現在の英国の女王は宗教的自由がありません。

II

この中で一番顕著なケースとして私が申し上げたいのは，ニュートラリゼイションの概念であります。まず政治的な意味での中性化ということが，1688年に英国におこりましたが，だいたい同じ頃に，オランダでも政治制度が上位になってくるようになっておこりました。フランスでさえ，同じようなことがあったと言えます。つまり，フランスでも宗教が政治的な問題として，扱われるようなことはなくなったということです。プロテスタント対カトリックの問題は，この頃以後は，重要な政治的な問題ではなくなりました。もちろん国際関係においてはそうであったと言えましょう。また教会の中での問題として，これは重要な問題であったと言えますが，しかし，国内の政治に関しては，そうではなくなりました。しかし一番懐疑的な結着は，大西洋の反対側，アメリカから来たといえましょう。

ここでは一番重要な問題は，宗教が自由化されていく方向にあったということです。つまり，宗教に対してのトレランス（許容性）というものが，ここでは主張されてきまして，多数の宗教の，自由が認められるようになってきたことです。それと同時に，宗教と国家との分裂，区別ができてきました。この頃いくつもの教会そのものが，国家からの支持に反対する運動をしてきました。英国では，もちろんチャーチ・オブ・イングランドがあり，これは国家によって維持されています。しかし英国でも，それ以外のプロテスタントのいくつかの教会があり，これは国家によって維持されていません。

いま申し上げましたことを背景にして，次に申し上げますことを聞いていただきたいと思います。アメリカが新しい共和国としてできあがり，その憲法が発布されましたのが1787年で，フランス革命の2年前であります。これは非常にユニークな憲法でありまして，それはどうしてかと申しますと，教会と国家との分離を謳ったからであります。もちろんその頃，各植民地にはいろいろな宗派がございました。マサチューセッツにはコングリゲイショナル・チャーチがあり，ペンシルベニアにはクエーカーがあり，バージニアではプレスビテリアンと，いろいろございましたが，圧倒的に，これらはみんなプロテスタントのグループでありました。

つまり言いかえますと，その頃アメリカは，宗教的にも，それから民族的にも同質の国民でありました。言葉も，英国語，スコットランド語を話さない人口は非常に少数でありました。この憲法は発布されました時に改正が付いていましたが，それはトーマス・ジェファソンが書いたものだと言われています。その第1には，出版と集会と宗教の自由ということが，ごく簡単に書いてあります。その一番初めには，非常に短かく，議会は教会を設立しない，つまり，ヨーロッパにある意味

での教会というものを作らないということ，それから二つめには，議会は個人の宗教的な行為に対して妨害しないということが書いてあります。これがアメリカの憲法のチャーターであり，現在まで続いています。

当時のヨーロッパの基準，つまり教会が国家によって支持されているヨーロッパの基準からみますと，これはセキュラリゼーション(世俗化)ということが言えるかもしれません。少なくとも教会は，正式な国家的なステイタスというものを失なったわけであります。しかしこれが，教会の衰微というふうに言えましょうか。私はそうだとは思いません。

それ以来の歴史は非常に複雑でありますが，マックス・ウェーバーの全般的な広い分析は，だいたいにおいて正しいと，私は思っています。つまりそれは，行動的な社会 (activistic society) という言葉で表現されると思いますが，昨日，冨永先生が使われました表現 instrumental activism の問題であると言えましょう。これは経済行為の分野に，主に使われましたが，しかしそれは知的な行動にもあてはまるものであります。その頃は，科学というものはもちろん，あまりたくさんありませんでした。ベンジャミン・フランクリンはたいへんおもしろい人物でありました。問題はデモクラシーであり，そこに権威に対する懐疑性というものが生まれ，また同時に，法律の重要性が生まれてきたのであります。法律の真実の基礎というものがその頃にできました。最高裁判所の判事，マーシャルが最高裁判所の伝統というものをこの時に築きあげたものであります。

問題は宗教というものでありますが，それに関しましてはフランス人のトックビルの書きました『アメリカにおける民主主義』という本によく書かれていると思います。トックビルは，比較的偏見のなかった人だと思ってよろしいかと思います。彼はフランス人のカトリック系の人であり，貴族の一員でありました。その彼が，アメリカ人ほど信仰心の強い民族を私は見たことはないと申しました。これは宗教が衰微しているという立場と，まっこうから反対しているのであります。

トックビルが，アメリカを訪問しましたのは1831－32年でありまして，これは憲法が公布されてからずいぶんたって後であります。その頃までは，アメリカはだいたいにおいてプロテスタントの人口が大半でありました。

その後重要な問題，注意すべき問題は，奴隷制度でありまして，これは宗教的な問題でもありますが，奴隷制度と，それにひき続いてアメリカ政府の設立へと進展していきます。1861年に奴隷制度をめぐって，内乱がおこりましたが，これは宗教戦争ではありません。しかし，これは，宗教というものを基礎においた道徳的な問題がこの戦争になったわけであります。

III

このトックビルが，アメリカを訪問しましたあとで，プロテスタント以外の移民が多く来るようになりました。その第一番目として，カトリック系のアイルランド人があります。これは，アイルランドでポテト飢饉がありました直後，1840年代の末期に起ったことでありますが，このときにアメリカに移民しましたアイルランド人は，技術のない労働者でありまして，アメリカはその頃，そういった労働者をたいへん多く必要としていました。それは西部の発展のためには，鉄道を敷かなければならず，そのために労働者が多くいったわけです。それで，大変多くのアイルランド系の労働者が来ました。そのときに来ましたアイルランド人の移民は中流の人たちはほとんどなく，もちろん貴族の人たちは全然ありませんでした。これに続きまして，ほかのカトリック系の移民も来るようになりました。まず，ドイツからの移民，これは割合早い時期に来ました。ここで問題になりますのは，アメリカの国民の中に，カトリック系の要素が多く出て来たということであります。しかし，アメリカはそれにもかかわらず，宗教的な問題による葛藤，紛争というものを最小限度にとどめたとはいえると思います。

19世紀の中頃までには，アメリカの社会はすでに特殊な意味で宗教的基礎が設立されていたといってよいかと思います。その過程において，プロテスタント以外の人たちの多数の移民がおこるようになってきました。この移民に関して一つの重要な特徴がありました。

そしてその中において，つまり，宗教的「憲法」が設立されたなかにおいて，新しい状態つまり，カトリック教とプロテスタント以外の移民が来るようになり，そのアジャストメントがおこるようになってきました。そのひとつの重要な要素は，言語でありまして，言語と民族性というものは非常に密接な関係にあります。その歴史的な偶然とでもいえましょうか，アイルランド系の移民は英語を話す民族でありました。

さて，アメリカ合衆国東部の北の方に17世紀以来ひとつの民族の大きなかたまりがあります。これは，民族的にはフランス人であり，フランス語を話すローマン・カトリック系の民族でありまして，彼らは，ひと所にかたまって隔離されたところに住んでいます。つまり，ケベックにいるフランス系のカナダ人のことであります。

これに反しまして，アイルランド人の場合には，二つのことがいえると思います。そのひとつは，アイルランド人は英語を話しました。そしてそれがアイルランド人がアメリカ社会の中にとけ込むひとつの条件となったということであります。もうひとつは，アイルランド人は地理的にも拡散し，どの地方にも集中しなかったということであります。アメリカの大きな都市には，東海岸以西，どこにでもアイルランド系の人たちがたくさんいます。ボストンも相対的にアイルランド人が多い都市の一つです。このようにして，我々は，宗教的に多元的 (pluralistic) な社会にだんだんなってきました。

もうひとつの最も重要な宗教的要素，それはアメリカにおいてはユダヤ人であります。植民地時代，アメリカには非常に少数のユダヤ人がいました。これは，ポルトガル系のユダヤ人でありました。その後，殊に1848年の革命に刺激されて，19世紀中葉には相当数のドイツ系ユダヤ人も来ました。しかし，ユダヤ人の移民が大々的におこりましたのは，1898年以後でありまして，おもに東ヨーロッパの方から来ています。みなさん，日本にはユダヤ人がたくさんいないのでごぞんじないかもしれませんが，ドイツ系のユダヤ人と東欧のユダヤ人のあいだには，たいへん大きな差異がございます。1890年から第一次世界大戦のあいだまでに，非常に大きなユダヤ人の移民がございました。

それからカトリック系の移民は先の西欧の方から南欧，東欧の方にうつり，アイルランド系のカトリックのあとには，イタリア系が一番多く，そしてそれに次いでポーランド系の，つまり東欧のカトリックの信者がくるようになりました。

最後に，第一次世界大戦後，また大きな変化がおこるようになりました。これは，アメリカの国内における人口移動でありまして，南部の農村地帯にいた黒人が，北部の都市に移動してきたことであります。現在のアメリカの人種問題は，おもに北部の都市の中にあるのであります。ゲトー (ghetto) という言葉は大変おもしろい言葉でありまして，もとは東ヨーロッパにおけるユダヤ人の社会をさしていったものでありますが，今ではアメリカでは，北部の都市における黒人の社会をさしてゲトーと呼んでおります。

IV

さて今までに申し上げましたことを要約いたしますと，民主的産業主義また脱産業社会へ到る宗教の条件が四つあると思います。先ず第一に，そのもっとも基本的なるものとして，単なるプロテスタンティズムではなくて，リベラル・プロテスタンティズムというものが，ここで生まれたということであります。この寛大なプロテスタンティズムというものは，もうひとつのファンダメンタル（正統派）・プロテスタンティズムというものに対応されます。後者の普通の目安は聖書の文字通りの解釈でしょう。現在は余り顕著ではありませんが，これは大変複雑な問題でありまして，ここではくわしく述べられません。

二つ目は，政府の機構において多元性をもった (pluralistic) 民主制度であります。この政府の多元性は第一に連邦制度，それから立法，行政，司法の権力の三分割があります。

三つ目は，言語による社会の分裂が避けられた，あるいはなかったということであります。これは，ベルギーとかカナダにおける事情と相反するものであります。

四つ目の条件といたしましては，プロテスタントが広く拡散されているということでありまし

て，これは，黒人の場合においても言えますが，黒人がアメリカ南部から移動をしてきたということも，かかわっていまして，黒人はほとんどがプロテスタントであるということがここに別の意味での横のプレッシャー，すなわち圧力をこの社会にかけてくるようになってきたとも言えましょう。

V

もうひとつここで申し上げたいのは，ケネディ大統領の選出，そして，その後の暗殺のもつ象徴的な重要性であります。ケネディは，裕福な家庭に生まれたものでありますが，そのような子弟によくありますように，政治のキャリアをとることになりました。しかし彼の場合はアメリカとしては初めてのローマ・カトリックの大統領であったわけです。ここに彼の象徴的な問題があるといえましょう。彼はアイルランド系の人でもありました。彼の祖父のひとりはボストンの市長でありました。フィッツジェラルドという名前で，ケネディの身分名はフィッツジェラルドとなっています。これは非常に重要な出来事でありました。その象徴的重要性は彼の暗殺，及びその国民に与えたショックに集中して見られます。彼の葬式は国葬ではありましたが，カトリックの葬式でありました。ボストンの司教カーディナル(枢機卿)・クッシングがこの場合儀式の司祭となりました。これは全国的な儀式でありました。

その後，私はもうひとつの儀式に参加する機会がありました。それは，この国葬のありました，2ケ月後，1964年の1月でありまして，ボストンのカトリック教会の大聖堂で，ケネディのために，ミサがもたれました。この場合にもボストンのローマ・カトリックの枢機卿，クッシングが司祭いたしました。私はカトリックではありませんので，どういうわけで招待されたのか知りませんが，招待されました。

ここで注意すべきことは，この追悼式の中でモーツァルトのレクイエムがボストン交響楽団によって，この大聖堂の中で演奏されたということです。ご存じかもしれませんがボストン交響楽団は，ボストン・ブラマニズムといわれているものの，ひとつの象徴的なものであります。つまりボストンのプロテスタントのエリートを代表するものでありまして，もちろん，カトリックではありません。そういう意味で，ボストン交響楽団がカトリックの教会でモーツァルトのレクイエムを演じたということは，この二つのグループが協同して，いっしょになったということであります。

VI

ここに簡単にスケッチしました，アメリカにおける発展すなわち，こういったいろいろな事件の発展が世界的なものと合流しているように思われます。その中でアメリカは，その世界的な発展の重要な基礎をつくっていったともいえましょう。我々は宗教において，エキュメニシズムあるいは，全世界的宗教という言葉を使いますが，これは，もともとはカトリック対プロテスタントの関係において，使われてきた言葉であります。ここで，ローマ・カトリック教会の中心で重要なことが起こりました。これはヨハネス二十三世法王の政権に象徴されていると思います。法王はバチカン会議を召集し，この会議は非常に長く影響をおよぼしています。その結果，たとえば，神父の禁欲ということ，つまり妻帯してはいけないということが，今では疑問にされてきて，カトリック教会内部で大きな紛争をおこしつつあります。その他にも，いろいろ問題をかもしだしました。現在の法王は，まだ地位についてから長くありませんので，どういうふうな方向に行くかわかりません。

私は，ヨハネス二十三世法王の死後ではありましたがバチカンの会議に一度よばれてまいりました。それは，非信仰の会議 (Council on Unbelief) という会議でありまして，この会議は，カトリック以外の人たちに呼びかけるための意識的なものでありました。その中にはマルクス主義者が2，3人そしてプロテスタントの人も何人かありまして，私もその1人でありました。

こういうことがありますのは，今，おこりつつあるいろんなでき事を象徴しているものだといえましょう。このようなでき事の一部といたしまして，マルキシズムの現在の状態があります。マルキシズムは，政治的な運動であるというふうに言

われてきていますが，それのみならず，これは政治的宗教でもあると私は思います。マルキシズムは宗教としての特徴を多くもっています。日本はマルキシズムの国の隣りにいまして，その影響を身近に感じる国であります。日本の西北には，ロシアが，西南には中国がいます。アメリカは，共産国からは，かけはなれていますが，しかし，共産主義は，現在の世界では非常に大きなファクターになっています。ことにインテリのあいだにおいては，西洋においても日本においても，重要な一要因であります。こういったいろんな出来事（エキュメニカルな動きと共産主義）は妥協するようになるでありましょうか？現在の事情は，例えば1930年代と非常に違っているといえる徴候があると思います。第2次世界大戦の直後の期間，いわゆる冷戦の期間は，共産主義は激しい政治的な問題として，取り扱われてきました。

その後，アメリカでは，いわゆるカウンター・カルチャーというものがおこりましたが，これは1960年代の学生紛争とも関連しています。この学生紛争は世界的なものでありまして，ソビエト・ロシアを除いた世界各国でおこりました。ロシアで学生紛争がなかったということは重要です。中国の文化革命もおそらく，そのひとつとみなしてよいのではなかろうかと思います。文化革命は政府の「主催」ではありましたがおもに青年の運動でありました。アメリカの，さっき申しました，カウンター・カルチャーの中には宗教的なものが大いにあります。それは，グラックとベラーの編集しました本の中にあります，学生の書きましたいろんな論文によってその一部を察することができます。学生が書きました論文の中には，東洋の要素，たとえば禅宗の要素が多く入っています。これは曲解された禅かもしれませんが，一応禅という名前を使い，また，一応禅宗との類似性のあるものであります。こういうわけで，エキュメニシズム，全世界教会——ユダヤ，キリスト教の世界を越えて——という動きは大変広い範囲にわたっておこりつつあるものだと思われます。

VII

ここで非常に暫定的な形で，日本と西洋との類似点を申し上げたいと思います。宗教というものの背景によって，産業化それから政治的民主主義さらに科学及び教育の発展ということが，どのようにしておこるかというファクターとして，次の三つの事項を述べてみたいと思います。そのひとつは，宗教の中立化，これは今朝申し上げたことでありますが，その暗示は随分以前からあったものと思います。私は前駐日大使ライシャワーの最近の著書『The Japanese』を読みまして，気が付いたのでありますが，他にもいろいろとこれにあてはまることがあると思います。つまり，日本の歴史は長く神道の要素もあり，仏教の要素もあり，それにキリスト教の要素もあり，宗教の多元的(pluralistic) な基礎があったと思われます。近代において国家神道が短期間ありました時代を除きまして，宗教は重要な政治的問題ではなかったと思います。

第二に申し上げたいのはウェーバーの申します現世指向 (this worldly orientation)，この実世界における指向性でありまして，これは宗教的問題に対する関心がなくなるということではなく，人間の宗教的宿命は，この世の中で決着をつけるのだという，指向性だとみてよいと思います。西洋においてこれは，キリスト教の，いわゆるトランセンデンタリズムによってあらわされています。日本においてこれは，ベネディクトがその『菊と刀』の中で申しますように，仏教におけるこの世での修業の強調ということによって表わされていると思います。

第三は社会的活動主義 (societal activism) ということであります。西欧社会の伝統を議論するに当りまして問題になりますのは，集合あるいは集団と個人，コレクティビズムに対してインディビジュアリズム，この二つの要素をどのようにバランスするかということであります。その中でコレクティビズム，集団が今までに，考えられました以上に重要であると思います。経済学的な立場から申しますと，きのう申し上げましたように，その反対に，個人が大事であるというような立場になります。社会科学的立場から申しまして，このような方面で日本と西洋とは，コントラストが容易に見られます。

私が，ここで申したいのは，日本とアメリカ，

あるいは西洋を比較しました場合に，いろいろな共通の指向が，ベネディクトの主張する文化的差異というもの以上に多く，恐らく，あるだろうということです。これらは大変暫定的な観察であります。(終)

司会　おどろきました，先生のこのご講義，時のたつのも忘れまして，酔えるごとく夢のように，うかがいましたけれどもこの時間が終りました。先生のこの非常に深い洞察を通しまして，私共，経済史家としましても今までかつてないほどのインスペレイションを与えられましたことを本当に心から感謝します。同時にまた，宗教社会学の発展がここに，ひとつの時期を劃する程のすぐれた学問的な内容を，この日の先生のご講義 "Modern Society and Religion" を通して与えられたことに対して，本当に心から感謝したいと思います。

(付記)

本稿は別府教授が通訳された録音を文章化したものを別府教授が，再度，原語の録音に照合して修正された後で，倉田和四生が段落，小節つけ，表現上の小さな修正など若干の編集および校正に当った。